

黒羽芭蕉の館だより 16

奥の細道シリーズ切手(3)

「広報おおたわら」3月1日号の本欄に続き、今回は「奥の細道シリーズ」切手シート(全20枚、昭和63年発行)のうち、第4集と第5集に記される芭蕉の4句を紹介いたします。

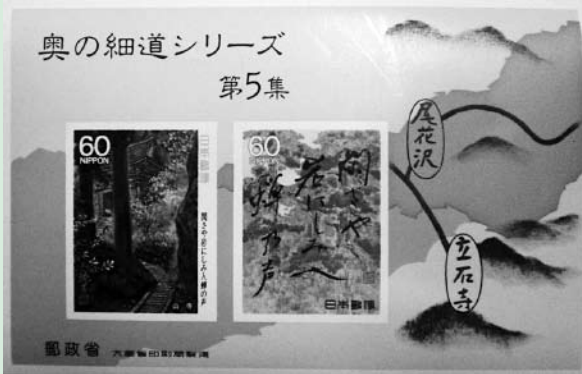
第4集は仙台〜平泉で、1枚目には「あやめ艸足に結ん草鞋の緒」の句が記されています。この句は、仙台で知り合いになった画工加右衛門から、紺色の染緒をつけた草鞋を饞別としてもらったことを受けたものです。句意は、折から端午の節句なので、あやめ草を思わせる紺の染緒を足に結んで、邪気を払い、勇んで旅を続けよう、となります。季語は「あやめ艸」で、夏の句です。

2枚目は、「夏草や兵共が夢の跡」という有名な句です。「平泉のここ高館は昔、義経以下の勇士たちが功名を夢見て奮戦した所だが、その功名もむなく一場の夢と消え去り、今は草ぼうぼうたる廃墟と化している。この夏草もやがて枯れ果てるのであるが、そこに人の世の興亡の姿を見る思いがする。」という意味になります。季語は「夏草」で、夏の句です。

第5集は尾花沢〜立石寺で、1枚

目は「まゆはきを俤にして紅粉の花」です。句意は、化粧道具の眉掃を連想させる形に紅粉の花が咲いている、となります。季語は「紅粉の花」で、夏の句です。尾花沢で紅花問屋を経営する清風への挨拶句で、恋の句いを帯びています。

2枚目は、「閑さや岩にしみ入蝉の声」です。句意は、何という静けさか、蝉の鳴き声が岩の中にしみ透っていく、となります。季語は「蝉」で、夏の句です。「おくのほそ道」中の絶唱の一つといえる句です。



奥の細道シリーズ切手 第5集 立石寺

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 34

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、野崎公園の中、駐車場から一步踏み込んで、公園に向かって右側にひっそりとたたずんでいる作品です。

立方体の側面から上面を通して反対側の側面までまっすぐに6本の溝がほられており、そのせいで、5本の線が引いてあるように見えます。



設置されている場所はしっかりと管理されている公園なので、周囲の環境も整然として

The Eavesdropping (盗み聞き)

ステファン コイック 2002年  
ユーゴスラビア連邦共和国(現セルビア共和国)

いるのですが、不思議とこの作品はその環境に溶け込んでおり、その場に彫刻があると意識することなく、作品に触れることができます。

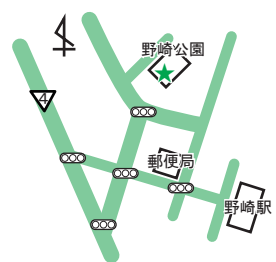


ステファン コイック

この作品を制作する際、作者は「初めて会う彫刻家達と寝食を共にして制作に励み、友情を育む」という経験が「制作へと駆り立てる原動力」となったそうです。

作者は現セルビア共和国(当時はユーゴスラビア連邦共和国)出身のステファン・コイック氏。ベオグラード芸術大学を卒業。フランスの国際シンポジウムやユーゴスラビアヤングアーティストビエンナーレなど、多数のシンポジウム・ビエンナーレなどに参加をしています。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718